

農業発展と階層性・地域性

宮崎県農業を対象として

中 島 寛 爾

(九州農業試験場)

1. 従来、南九州農業は限界地農業と称され、生産力の低位・停滞性さらには後進性といった性格規定がなされてきた。しかし、現在の宮崎県農業に関する限り、そのように特徴づけることは妥当ではない。宮崎県農業は、昭和40年以降、野菜・畜産への転換・拡大により飛躍的に発展しており、生産性と所得の水準は著しく向上し、しかも持続的傾向を示している。とはいえ、その此展は、階層性と地域性を明瞭にしつつ、階層間格差と地域間格差の拡大を内包してのことである。ここでは、宮崎県農業を対象に、①従来の農業の性格と発展の契機、②農業発展と農業投資との関連、③階層性と地域性の実態、を明らかにし、④現状の問題点を検討することを課題とする。

2. 南九州農業に対して、従来上記のような性格規定がなされたのは、この地帯特有の劣悪な自然的・社会経済的条件下での商品生産の特質によるものであり、社会的投資が全国的な水準をはるかに下回る極めて低い状態のもとで、再生産構造が脆弱で低生産性→低所得→低貯蓄→低投資→低い資本装備→低生産性の悪循環という基本的性格をもっていたからである。宮崎県農業の発展は、地域に即応した農業諸施策が推進され、生産基盤や流通条件の改善などの社我的投資がなされたことが重要な契機となっている。

3. 農業諸施策・社会的投資は個別的投資を誘発し、これによって従来の生産構造が改変された。ただそれには、低い貯蓄水準で高投資をおし進めねばならなかったために、多額の借入金に依存せざるをえなかった。それはともかく、宮崎県農業は、借入金による高投資が資本装備の向上→生産性の向上→所得の向上に結びついて従来の低生産性の悪循環を克服し、さらに、貯蓄の圧縮と

多額の借入金によってより高額の農業投資を行い、より高水準の資本装備によってより高い生産性と所得をもたらす、という拡大再生産の方向で発展している。

4. その発展は、主として、150a以上の階層と広域沿海中部・南部の地域によって担われている。近年では、これらの階層・地域の発展に対して、他の階層・地域の停滞・低下傾向が認められ、階層間格差と地域間格差が拡大しているのが大きな特徴である。階層間格差については、借入金による高投資が資本装備の向上→生産性の向上……という上記の発展方向において、150a以上層が非常に顕著なことによるものである。また、地域間格差については、自然立地や農業諸施策・社会的投資の利益をうける度合の違い、および耕地規模等の生産条件の相違などが作目選択とも関連して資本装備に影響し、それが生産性に反映しているものとみられる。

5. 近年の農業動向と今後の県の振興方向からみれば重要な問題として次の2点が指摘できる。第1には、貯蓄の圧縮と多額な借入金による過大な投資のもとの資本効率・労働効率の停滞・低下傾向の問題であり、第2には、相対的に生産性の低い階層・地域の生産性向上の問題である。第1の点については、商品生産部門が資本蓄積をおし進めるほどに技術水準の向上をはかる必要があり、そのための技術改善とその普及が要請される。第2の点については、小規模で規模拡大・経営転換をはかっていく意欲のある農家をとらえて、今後の農業の担い手として育成していく必要があり、また、生産性の低い地域の場合は、資本蓄積の問題が大きいことから、社会的投資と個別的投資を相互補完的に拡大していくことが重要と考えられる。